

日本史の傾向と対策

| 方式・日程 | 問題番号 | 出題分野 | 出題内容 |
|--------------------------|------|-------|--|
| A方式 11月1日 問題▶P.60～ | 第1問 | 古代 | 古代の年号（大化の改新、大宝律令、奈良時代の政治、桓武天皇、天台宗、荘園の改革） |
| | 第2問 | 中世 | 院政期～戦国時代（院政期～鎌倉時代の絵巻物、執権政治、南北朝、一揆、応仁の乱、戦国大名） |
| | 第3問 | 近世 | 江戸時代（江戸幕府の職制・政治制度、交通の発達と三都、開国と貿易、幕末の動き） |
| A方式 11月2日 問題▶P.64～ | 第1問 | 古代～中世 | 祭祀や宗教（古墳、末法思想、藤原道長、禅僧と文化、奈良～鎌倉時代の仏教） |
| | 第2問 | 中世～近世 | 鎌倉～安土桃山時代の年号（承久の乱、建武の新政、南北朝、織田信長と天正期） |
| | 第3問 | 近世 | 江戸時代（江戸幕府の経済政策、田沼意次の政治、天保の改革） |

傾向 近世と中世の出題割合が多く、標準レベルの問題が多い。

① 出題形式

大問数は1日目と2日目ともに3つであり、小問数は1日目が40問、2日目が37問という構成である。

解答方式は、すべて番号を選ぶ形のマークシート方式である。設問形式は、空欄完成や単答選択、正誤4択などで構成されている。

② 出題内容

各大問は、年号、祭祀や宗教、社会などのテーマを持って作成されているものが多いが、設問で問われる内容はこのテーマに関するものだけにとどまらず、さまざま分野からの出題となっている。

出題の比重を時代別に見てみると、1日目は古代、中世、近世が比較的バランスよく出題されており、2日目は近世と中世がそれぞれ4割前後と多く、残りが古代からの出題となっている。総合的に見ると、今年度は**近世史**と**中世史**の比

重が高く、昨年度に比べて古代史の出題が減少した。古代～近世の様々な時代から満遍なく出題が見られるが、奈良時代以前の時代からの出題は少ない。また、1日目、2日目とも、近代以降からは出題されていない。

すべての設問はリード文をもとにして構成されており、写真・絵などを使った問題は出題されておらず、史料問題もほぼ見られない。

③ 難易度

教科書の重要事項がわかれば解くことのできる平易な問題が3割程度、教科書の内容を正確に押さえていけば対応できる標準的なレベルの問題が5～6割程度、正確で詳細な知識を必要としたり消去法などを用いなければ答えにくいような難度の高い問題が1～2割程度という構成になっている。全体としては標準的な難易度であるといえるが、難度の高い問題への対策も必要になってくるだろう。

対策 教科書から始める段階的学習と知識の活用。

① 教科書を中心に、段階的に学習を進めよう

昨年度から始まった推薦入試であるが、基本的な学習方法や対策方法は一般入試に向けてのものと同様である。まずは歴史の**大きな流れ**をとらえるため、教科書の重要事項を確実に身につけることに主眼を置こう。教科書を読み込みながら、あわせて空欄補充でキーワードを答えさせる整理ノート形式の教材や、1問1答式の問題集も活用するとよい。

第2段階では、キーワードを答えられるだけでなく、その内容が理解できているか、正誤問題に取り組むとよい。**5W 1Hの要素（いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どうやって）**はわかっているつもりでも、正誤問題を解いてみると、自分の理解の不足している要素を発見できる。正誤問題で正答率が高まるということは、正確で詳細な知識が身につけているということである。そのほか、キーワードについて自分の言葉で説明する文を作成してみることも有効な方法である。

第3段階では、政治史、外交史、経済史、文化史など、**テーマ別の通史**を学習しよう。時代ごとに学習してきた内容をテーマごとにとらえ直すことで、体系的な理解を深めることができる。また、実際の入試問題ではテーマに沿った出題が行われることが多いので、そうした切り口に慣れておくという意味でも大切である。できれば、「文化」「土地制度」といっ

たテーマ別に、自分でノートに整理し直してみることをお勧めする。関連する歴史地図や写真を貼るなど、自分なりに要点をまとめることが重要だ。

② 知識を増やしながら記憶を定着させよう

歴史の大きな流れが頭に入ったら、その骨組みに肉付けするようなイメージで詳細な知識を加えていこう。教科書の欄外やコラムにも目を通したり、関連する内容の史料を確認したりするとよい。その際、**背景や因果関係**などに注意しながら、これまで学習した内容と結びつけて理解していくことが重要である。

ある程度知識が増えてきたら、「覚える」作業も必要である。間違えた問題に日を置いて再度取り組んでみる、チェックシートを利用して忘れていた箇所がないか確認するなど、こまめに繰り返して記憶を定着させていこう。文化史の学習では、作品名や作者名を丸暗記するのではなく、資料集で実物を確認しておく覚えやすく忘れにくい。

③ 知識を活用し、応用力をつけよう

既に授業や自習で十分な知識を蓄えていても、実際の入試に対応するには、応用力や慣れが必要である。問題集で演習を積み、知識を補いながら実戦的な力を養っていこう。また、推薦入試だけでなく一般入試の過去問にも取り組むなどして、さまざまな形式の入試問題に慣れておくのもよいだろう。